



Title	翻刻『万代大雑書古今大成』（十四）
Author(s)	伊藤, 孝行; Ito, Takayuki
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 77, 1(右)-12
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91477
Type	departmental bulletin paper
File Information	77_02_Ito.pdf



《翻 訳》

翻刻『万代大雑書古今大成』（十四）

伊 藤 孝 行

《要 旨》

本稿では、『万代大雑書古今大成』（読み…ばんだいおおざっしょここんたいせい）の翻刻の一部を掲げる。『万代大雑書古今大成』は天保年間に発行され、明治に入り改訂版が刊行された。内容は、生活するうえで必要なことが記してある便覧である。それゆえ、古くから伝わる習慣から占星術、名付けの際の留意点等々、多岐にわたる内容となっている。

『万代大雑書古今大成』は、管見のかぎり今のところ翻刻されていない。近代日本語資料の一として、また近代に於ける日本の習慣や風俗についての資料として、一定の価値はあろう。本稿では伊藤（2023）に続き、「あ一」より「さ十三」まで掲げる。

SUMMARY

Reprinting: “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” (14)

This paper presents a part of the book entitled “Bandai Ozassyo Kokon Taisei”, which was first issued in the Tenpo Period (1837-1858), rewritten in present-day Japanese [characters]. It is a guide book describing the particulars of daily life at the time. It ranges widely over many themes, from traditional customs and astrology, to the points to note in naming children. Although “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” is a printed book, and has had a revised edition issued in the Meiji period, it has not been translated into modern characters before, to the author’s knowledge. As one of the sources of modern Japanese and also as a material describing Japanese manners and customs of the past, it is of indisputable value. An abstract from the book, together with the title, colophon and preface, are reproduced here. This paper reprints the Chapters A-1 - to Sa-13 in Ito (2023).

／ 2 ヲ

凡例

- ・ 漢字の表記は、通行の字体に改めた。
- ・ 割注は へ へ で示した。割注中の改行箇所は 〳 で示した。
- ・ ● は翻刻しかねた箇所である。今後の課題としたい。

あ一 雨の説

雨ハ陰陽の和にして而天氣まじはりてふる也水気のぼりて冷際にいたり雲と成その雲上へ日氣を●だて下の熱氣をへだてる時ハ冷暖の氣雲中にありてめぐりとらかしてあいせまる時ハめぐりて千万の螺髪のごとくふつていきほひまさに●んしてたちまちに雨生ずるなり朱子曰雨ハ陰陽の氣むしねつしてなる也飯甑に蓋あれハその氣●して●滴くだる事淋瀝たるがごとしとなり

あ二 商ひ初吉日

甲【とら／たつ】乙【うし／ミ】丙【う／とり】丁【とら／たつ】戊【ね】庚【とら】壬【とら／たつ】癸【ミ】

あ三 新しき衣裳を着て向ふ方角

春【たつ】夏【ひつじ】秋【いぬ】冬【うし】

あ四 あたらしき●●を●吉日

甲【とら】庚【ね】辛【いぬ】壬【とら】癸【う】

あ五 新しき席蓆をしかぬ日

正【うし】二【たつ】三【ひつじ】四【いぬ】五【うし】六【たつ】七【ひつじ】八【いぬ】九【うし】十【たつ】十一【ひつじ】十二【いぬ】

あ六 天の河の図説

天の川ハ河漢銀河星河繩河等皆天河の名なり其象河の如くなるによつてかく号る也其實ハこと／＼く小星あつまりて遠見にハ其ひかり一疋の絹のやうなり望遠鏡といへる星めかねにて見るときハあきらか也此天の河北ハ参井の間より諸星を経て尾箕星の間にいたり南ハ尾箕のあひだより亀三角海石等のあひだにかくれて天社●矢にあらハれ参井のあひだに合して南北一帯となる天の陰晴時候によつて増減広狭あり○古説に金の氣なりといへりこれハ秋に至て晴光なるゆへかくいふなるべし

さ一 三伏日の事

三伏日といへるハ五月中の節の後第三のかのえの日を初伏と云第四のかのえの日を中伏と云立秋の初めの庚の日を末伏と云

六月大暑の日よりのえハ金
なれバ火剋金と剋する故伏と云
又立秋も残暑甚しけれバかく
のごとし此日旅に立事はなハだ
よろしからず万事此日を用ふ
べからずとぞ

さ二 指神の方の事

阿律智神の方ともいふ此かたを万事に忌事ハ第四禪定
摩醯首羅天のかたなるゆへなり歌に

子ハ五ツ丑ハ九ツ寅ハ十うさぎも辰も五ツなりけり

巳未ハ六ツとぞまうす亥ハ七ツ酉ハ十にて午申ハ八ツ

さ三 三世相明鑑

寄光枝	きのえのとし	金財枝	きのとのとし
千歳枝	ひのえのとし	銀宝枝	ひのとのとし
散高枝	つちのえのとし	天高枝	つちのとのとし
五柳枝	かのえのとし	虚部枝	かのとのとし
豊陽枝	ミづのえのとし	柳復枝	ミづのとのとし

きのえきくわうのえだにうまるゝ也●かう●くあき
なひみやづかへしてよし男●につきておんご
くにわうらいする事あり上の人ハほうしになり
てよし中の人ハみやづかへにゑんあり下の人ハかミに
つかへてよしはるのうまれハ大ふくあり日の

しよくまめ五斗ありなつのうまれハむびやう也
日のしよく米三斗ありあきのうまれハ米五斗
ありふゆのうまれハ日のしよくきび一斗あり
此えだの人ハわかきときハひんなりともおひて
ふくありぜんぜハおハりのくにのあつたの宮のねづミ
みなりそのときのしるしにハかたの上わきのしたに
ほくろありこれをほりてわたにぬり本明星を
まつるべし此人ハ七八さいにてかミのたゝりあるべし
うまれどころのくわうじんをまつるべししから
ばバふさいにゑんうすく十五六にてくせつあり
又ぬす人にあふとあり十七八にて男女につきて
やまひあり又わがいゑをいづることあるべし二十六七
にてさいなんあり三十八九にてつゝしむべし四十八九
に●火事のおそれありたゝしふくきたる五十六にて
やまひありいのちハ七十六十一月むまひつじの日に
死すつねにくわうじんをまつるべしふげんぼさつ
ぢざうぼさつをねんじじげんごんをもつハラ
とせバゆくすへめでたかるべし
きのときんざいのえだにうまるゝ人ハうへをたつ
しやにして下のごゝろふかしふくじんになりて
いのちながしたゝしたんきなりわかきときハひん
なりおひてハこゝろかしこし人にあひゑんありたゝし

ほうしになりてよしはるなつのうまれハ大ふく

ありふぼのとくぶんをえずおやのこゝろにしたがひ
かみほとけにつかへてよしあきふゆのうまれハひん
なり日のしよく米売斗ありぜんしやうハちこの
くにくびき郡のうしにてありしがびつちうのくにき
びつのミヤへほけきやうをつけてしゆへに人と

うまれたりいせにはかうるにうまるべしよく

●ごせをねがひ心たゞしくいとなミをばげミせい出

さバ仕合よかるべし此人ハ六七才にてやまひあり
八九才にて大病つゝしむべし十三におやのふけう
をうくるかおやにはなるゝ事あるべし十四五六に
てゆミやをつゝしむべし十八九にて男女につき
くぜつあり二十一●にて大事あり二十四五にて女難

か又ハ人の事につきてききうせんをつゝしむべし二十七
にてくぜつありたゞしとをくゆけバかへつて財を

える三十二にてやまひあり三十三四にてさいし
につきてくぜつあり又ハうミかはをつゝしむべし
四十三にてすこしふくきたる五十一二にてくわん
ぬをすゝむあるべし五十三にて大ふくきたる

いのちハ七十三またハ八十一の十月きのとの日に
死すべし屋くしをつねぐねんじ心をたゞしく
ほうこうわたくしなく親にかうくならバかならず

ふつきにしてはつたつすべし

ひのえせんざいのえだに生るゝ人ハふつきにして
くわんのそうあり此人は心きよくしてきにんにあい
せらるゝ也すこしきよごんありたゞし子ハおやに
したがはずいろしろけれバふつきなりせいたかれ
バ貴人のおほへありはるのうまれハつねに病あり
なつのうまれハ大ふくありあきのうまれハひん也
ふゆのうまれハかミほとけにつかへてよかるべし
日のしよく白米三斗ありせんしやうハしなのゝ、
くにあさまのだけのはちくまにてありらい

せハいぬとうまるべしつねに道しる人にたよりて
じんき五じやうをまなばゞ人間にうまるべし此人ハ水
へんにて死することあるべしよくくつゝしミて

よしわかきときはぢうしよさだまりがたしとし
よりてさだまるべし十七才にて男女につきやまひ

あり三十七八九にてわつらひありまたぢうしよ
たぢろくあるべし四十二にて火ことをつゝしむ
べし四十八にてやまひあり五十すぎてふつき有
ひがしの方ひき●やしきにすみてよしのちハ

六十一又は七十三の秋ミづのえかのえの日死すべしこん
ひらハさいなんをまぬかれし●給へばつねにしんぐ
してつゝしまバイゆくすへよかるべし

ひのとのぎんほうのえだにうまるゝ人ハよき人の
 おぼへありかうにんのでうあいをかうふるべしたゞし
 かうさくにゑんあり日のしよく白米壺斗あり
 はるのうまれハやまひありしんしやうよし夏
 のうまれハかうさくしてよしあきのうまれハしん
 しやうきしづミ多しふゆのうまれハかみほとけ
 につかへてよしぜんぜハいづのくにのみしまのミヤの
 くまたかにてありしがそのときのしるしにかたのま
 ハりにほくろありらいせハふくじんとうまるべし
 このくるしミによりてつねにおもひごとたへずゆへに
 右のほくろをほりてき●にぬり本明星をまつりて
 いのらバ今生後世あんらくなるべしわかきときハ貧
 なりともとしよるほどふくきたる子ハ三人又ハ七
 人あるべしたゞし此えだにうまるゝ人ハおやの氣
 にたがふことあるべしよく／＼かう／＼をつくしてよし
 七八才にてやまひあり十四五才にてくぜつあり
 十七八にて男女につきわづらひあり二十八九にて
 いゑを出るとありしからずハやまひあるべし
 三十一より三十三にてふくきたる三十四にて目を病
 こと有三十七八にてかぜのやまひあり五十二にて
 火ことありいのちハ七十八正月きのとのゐの日
 死すべしつねにくわんおんミやうけんをいのりて心

たゞしからバすへはんしやうなるべし
 つちのえさんかうのえだにうまるゝ人ハ十方より
 たからを得べし人にたつとまれきにんにあいせられ
 ものを得る人にいやしめられずこゝろだてけたかく
 して子五人もしくは七人としたけての子ハ女子
 なりでんばくにえんありたゞしぢうしよありと
 いへどもつねに物をおもふ女子をあつかふぜんぜハやま
 とのくにのこくぶんじのありにてありしときはな
 のえだをくひおりたるゆへに人にうまれたりらい
 せハてんじやうにうまるべし日のしよく白米三
 斗ありたゞしはるのうまれハ大福ありつねに
 ぢうしよさだまらずなつのうまれハいのちながし
 身ハひんなる事もあり心ふかしあきのうまれハいの
 ちながく大福ありふゆのうまれハたんきなり六才
 にてやまひあり十三さいにて大にわざわひありおやに
 はなるゝかしんしやうのだいじあり十七八にてくぜつ
 あり二十三にて一門につきわづらひあり二十四五に
 てふさいにつきくぜつあり二十八すぎてものたくハゆる
 三十三にて少しよし三十五にてちぎやうます三十七
 にてやまひあり又家をいづることあり四十にてふく
 きたる四十二にてくぜつあり五十一にて大ふく来る
 五十三六十四にてやまひありいのちハ七十三八月ミづ

のえミづのとの日むまのときにおはるべしつねく
 たまをまつ六日やくしをねんじ金銀銅鉄すべて
 かな道具によるいとなミをなしてはんじやうすべし
 つちのとてんかうの枝にうまるゝ人ハうハべ心しづか
 にして下心ふかしむくちにていつハリをいはずふく
 ありていのちなしまづしき人にもをとおしまずせんぞ
 くらゐある人のすぢなるべしたにんのざいほうをえるたゞし
 わかきときハふくありいへどもおひてひんになること有
 いろしろけれバ子なしありてもそだちがたしふく有
 れバ子なしひんなれバ三人より九人あるべしぜんぜ
 ハゑつちうのくにたてやまのうしにてこくぶんじへ
 大はんにやぎやうをおひてのぼりたるゆへににんげんに
 うまるそのときのしるしにハかたのわきわきの下に
 ほくらありらいせにてハてんがに名をしらるべし
 はるのうまれハふくあり日のしよくまめ五升あり
 なつのうまれハむびやうなり日のしよく米壹斗有
 あきのうまれハ心よしたゞしたんき也日のしよく白米
 六升ありたゞしざいほうハたくハへがたしふゆのうまれハかう
 さくにゑんあり日のしよくまめ三斗ありつねに
 ものいミしてよし三才にてやまひあり七八才にてわづ
 らひあり十三才にて神のたゝりあり十八九才にて
 いゑをいづるあり二十一にて大ふくありちぎやう

でんばくにゑんあるべし二十四五にて男女につき
 わづらひありたゞしゆみやにつきてよし二十八にていゑを
 いづることあるべしうミカハにてさいなんあるべし
 三十四五にてこうろんなしあやうきことありさなき
 ときハ目をやむことあるべし四十四にてくぜつを
 つゝしむべし四十七八にてざいほうにゑんあるべし
 五十一にて大によし五十三にてけんぞくにつきて
 おどろくことありうがじんをいのりてよし六十
 三にてくらゐをますいのちハ八十三の春きのえきのと
 の日におはるべしぢざうぼさつやくしによらい
 をねんじてよし此人一代のうち竹のつえをつく
 ことをいミさくべし
 かのでごりうの枝にうまるゝ人ハミやづかへ又ハ
 こがひにゑんあり上べゆうにして下心ふかしたゞしたん
 きなりがくもんこゝろざしありざいほう身に
 つかず人のひんを身にかへるじひしん有ふく有バたん
 めいなりぢうしよにゑんありはるのうまれハひん
 なりなつのうまれハはらの病ありあきのうまれ
 ハふかうなりぶつじんにつかへて孝の志をいのりて
 よしふゆのうまれはほうしになりてよしはるなつの
 うまれハ日のしよく米三斗有あきふゆのうまれは
 日のしよく大豆二斗ありぜんせハするがのくにふじ

川のだいじやなりらいせにてハ大人とうまるべしその
 ときのしるしにハかたのうへにほくらありつねに
 ぎをんごづてんわうをまつりにんわうぎやうをきゝ
 又どくじやせばらいせハよき身のうへとうまるべしものさま
 たげ有てざいほうたくハへがたし此人うまれて百日の内に
 かさのやまひあり三才にてあやうき事あり六七才に
 てはらをやむ十六七八才にてけんぞくにつきてつゝ
 しミありまた男女につきてゆへあり二十四五才
 にて火事のおそれあるべしくぜつありてたからを
 うしなふこともあるべし三十三にてやまひあり又思ひ
 ごとあるべし四十二三にて大にふくあり四十六七にて
 火事あるべしくぜつありてたからをましなふ事も
 あるべし四十九五十三にてたからをます六十一にて
 こしのやまひをわづらふことあるべしいのちハ七十六
 またハ八十三にて死す五月かのえかのとの日なるべし
 つねにくハうじんあミだをまつりてよし
 かのとときよぶの枝にうまるゝ人ハしやうじきにして
 こゝろたけし下心ふかく人にあひゑんありいしよく
 まんぞくなるべしたゞし人のいふことをもちひず
 つねにぢうしよにつきわづらハしきことありふさい
 さだまらず人のかたよりものをえるしやうばい
 こがひにゑんありみ子ハ三人もしくはハ十一人あるべし

はるなつのうまれハひんなりぶつじをしんぐ
 してよしあきふゆのうまれハふくあり土公
 じんをまつるべしはるなつのうまれハ日の食
 三斗ありあきふゆのうまれハ日のしよく黒米
 五斗ありぜんぜハむさしの国浅草寺のいたちなり
 そのときのしるしにハ右のちのうへにほくらあり
 おやにふかうなるべし女はかうくゝなりしかれども
 諸人のかしらとなるべし三才にて神のたゝり
 あり七八才にてちうやうあり十三にてあやうき
 あり十九二十にてりうじんのたゝりあり二十七
 にてくぜつあり三十五すぎてたくハへでける四十
 二三才にてさいなんくぜつあり五十六にてくらのぬし
 となりいのちハ八十三又は九十三九月きのへねひのえ
 ねの日に死すべしくわんおんハふくじゆをまもり給ひ
 ぢざうハむびやうそくさいにまもりたまふずいぶん
 しんぐしてよし
 ミづのえふやうの枝にうまるゝ人ハすこしふく有
 こゝろしづかなりはるあきのうまれハ大によし
 なつふゆのうまれハひんなり子ハ五人もしくはハ九人
 ありそのうち女はかうくゝなり出家する子も有べし日の
 しよく米壹斗ありぜんぜハあふみのくにのあかいぬ
 にてあり其時のしるしにハ右のはらにほくらありらい

せハやうしにうまるべつねに心もちたゞしくたしなミ
 まもらバ武家にうまるべし三四さいにてあやうき事あり
 十三にてやまひあり又海川をつゝしむべし二十四五にて
 大にさいなんあり二十九にてふくきたる三十四にてく
 ぜつか又ハ火事にあふべしまた家をいづる事あるべし
 三十七八にてぬす人にあふかいづれそんをすること
 あるべし四十にてふくきたる四十三のはる病あり
 あき三月のうちにぬす人にあふべし四十七八にて
 なつ三月のうちに子けんぜくにつきてくぜつあり
 五十一にてふくきたるいのちハ七十五月あとの日
 死すべし八まんをしんずべし
 ミづのとりうふくの枝にうまるゝ人ハかうさくに
 ゑん有ミめよけれバ心たゞしき也つねに人にそねまるゝ也
 いづれもすちめにてたんきなりはるのうまれ
 八日のしよく米三斗ありなつのうまれハ黒米
 壺斗八升ありあきのうまれハ大豆三斗ふゆの
 うまれハきび●斗あり神のたゝり有てざいほうたく
 ハへがたしぜんぜハいせのくにあねがこほりのうしにて大神五の
 御木をひきしゆへ人げんとうまる三づちごくちくしやう
 のくるしミをのがるゝやうによく／＼ごせをねがふべし
 六七才にてさいなんあり八九才にてやまひありよく／＼
 つゝしミてよし十三にてはらをやむ二十六七にて

くぜつありまた火ことをつゝしむべし三十一にてさい
 なんあり三十七八にていゑをいづることあり四十三
 にてぢうしよにつきてわづらふ事あるべし又火事
 をつゝしむべし四十七八にてざいほうを得る事有
 六十一にてひごとのおそれありいのちハ七十三またハ八
 十七五月ミづのとのゐの日死すべしぢざうばさつ
 をねんじてよし

さ四 酒造る吉日

正【ね】 二【うし】 三【とら】 四【う】

五【たつ】 六【み】 七【むま】 八【ひつじ】

九【さる】 十【とり】 十一【いぬ】 十二【あ】

正二月ハ【ミづのえ／ミづのと】

三四月ハ【ひのえ／ひのと】

五六月ハ【ミづのえ／ミづのと】

七八月ハ【かのえ／かのと】

九十月ハ【つちのえ／つちのと】

十一十二月ハ【ひのえ／ひのと】

曆中段 なる さだん

おさん 此日よし

さ五 酒造るに忌日

大の月ハ 十八日 二十一日

小の月ハ 二日 三日 二十日

曆中段 とづ やぶる

のぞく 此日わろし

さ六 酒の口を開く吉日

きのえとら きのとよし

きのとミ ひのえさる

かのえね ミづのえね

さ七 造作家造りとて二道ある事

造作ハ神仏に用ふるなり

家作りハ人の為にとる但

いづれもあるじの年によ

りていむ日あり左のごとし

子のとしの人ハ とりの日

丑のとしの人ハ とらの日

寅のとしの人ハ 【ミ／ひつじ】の日

卯のとしの人ハ むまの日

辰のとしの人ハ 【ミ／ゐ】の日

さ八 産の時向ふ方角

正【ひつじ】 二【いぬ】 三【うし】 四【ひつじ】

五【たつ】 六【むま】 七【ひつじ】 八【ひつじ】

九【さる】 十【さる】 十一【いぬ】 十二【とり】

但大おん大將軍さい

せつ金神さもん天一方又ハ

月塞り日ふさがり時ふさ

がりにむべし

さ九 産の時心得の事

婦人産にのそみてねがへり

するたびにごとに腹一しきりづゝ

いたむなりはらいいたむとて

もこしいたまざるうちは

出産するものにあらず

とかく子を多くうみて

産にあたりつけたる功者なる

女をたのミそばにつけおく

べしすでにうミおとして

さつそく安神散を用ゆ

べし酔をかぎ日を閉て

ひざをたてゝあしをのばす

べからず又久しくねむる

事あしく時●むねより下へ

撫おろすべし白粥を食べし

さ十 産後養生

七●のうちなまざかな喰ふ

べからずおどろきおそるべか

らず泣かなしむるわろし

すき間より風のあたる
事わろし精つかすべからず
はやく髪ときゆふことわろ
し早く行水すべからず
熱あらバこし湯もつゝし
むべし水にて手足冷す
べからず早く爪とりやうじ
などつかふべからず
さ十一 産後よき食物
かゆ ひともじの白ミ【七日後】
はも 蛭くらげ こい
とびうを
さ十二 産後あしき食物
なすび うり わらび
たで いも そば
こんにやく 梨 にんにく 酢
こせう 山せう ちさ
あづき 酒 こんぶ きのこ
くだもの なまひえ物 めんるい
柿鯛の二品ハかたく合食すべか
らずもしあやまり喰バたちまち
死す産後にハ大に毒なり油け

も大にわろし
さ十三 作物雌雄を知る事
稲【男 もとえだ一本／女 もとえだ二本より】
大麦【男 もとの実二ツ／女 もとの実三ツならび】
小麦【男女 大麦とおなじ事なり】
粟【男 もと三ツ／女 もと四ツ】
稗【男 もと三ツ／女 もと四ツ】
黍【男 もと三ツ／女 もと四ツより】
蜀黍【男／女】
黑豆【男 もとえだ一本／女 もとえだ二本】
白豆【男 もと一ツ／女 もと二ツ】
小豆【男 もと一ツ／女 もと二ツ】
冬豆【男／女 男 しろし／女 くろし】
胡麻【男／女】
里芋【男／女 茎左りまきハ男／右まきハ女】
蒟蒻【男／女 茎いもにおなじ】
綿【男 計画ハはんげせうの／ころのかた●なり／女 女ハのさ
れ多し／男のたね／女のたね】
牛蒡【男 男ハすぢありてかたし／女 女ハやハらかにてうま
し】
大根【男／女 日のてるとき葉の少ししほるハ／女なりまびくと
き女をのこすべし】

蕃薯【男／女 男ハはにまるミあり 女 女ハはにかどあり】

甘藷【男／女 男の子／女の子】

隠元豆【男／女】

麻の実【男／女】

蚕豆【男 白し／女 くろし】

榧【男／女】

瓜【男／女】

茄子【男／女】

柿【男／女 男のたね／女のたね】

桃【男／女】

梨【男／女】

梅【男／女】

蜜柑【男／女】

びハぶどうなど／男ハたね一つ女ハたね／二ツよりなり

天地自然の道理にて作物及び

くだものにもそれ／＼に男女そなは

れり右の図の如く●種をえら

ひて蒔ときハ大小益ありまた

何によらず女のかたハ美味に

して尤よろし稲ハ壱反に

て二斗より三斗ほども余

計とりミあり尤凶年にても

そのわりに取るなり

謝辞

本翻刻をなすにあたり、篠田健一氏に数多御教示いただいた。
ここに記して感謝申しあげる。

註

伊藤孝行（二〇二三） 翻刻『万代大雑書古今大成』（十三）、「メ
ディア・コミュニケーション研究」七七、一―十一頁